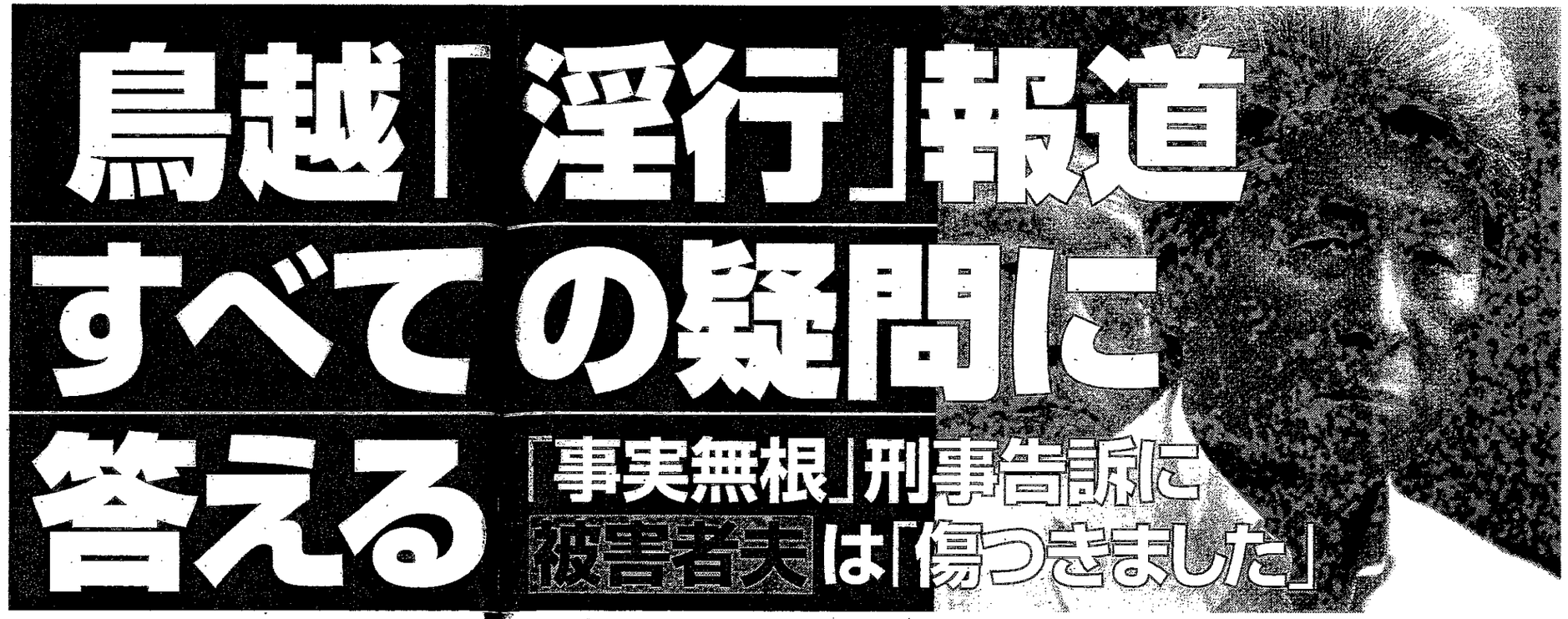
2016.8.4
週刊文春

鳥越「淫行」報道 すべての疑問に答える

「事実無根」刑事告訴に 被害者夫は「傷つきました」



「伊豆大島は消費税５％に」と訴える鳥越氏

選挙戦の最中に記事を出したのはなぜか？

「私たち夫婦だってこんなことを公にしたくはありませんでした。でも彼が都知事に立候補すべき人間でないことはこの十数年間でよくわかっています。彼の正体を知っている私たちが黙っているのは、結果的に都民を騙すことになるんじゃないかと罪悪感を感じ、告白したのです」

小誌が先週号で報じた鳥越俊太郎氏(76)の「女子大生淫行」疑惑は大きな反響を呼んだ。その衝撃的な内容に「なぜ選挙戦の最中に記事を出したのか」という声が小誌編集部にも寄せられた。そうした声に対して、被害者A子さんの夫、永井一晃氏（仮名、30代後半）が改めて、告白の真意を語る。

二〇〇二年、当時、知人の教授を通じて有名私立大に出入りしていた鳥越氏は、〝お気に入り〟だったA子さんにこう声をかけた。

「別荘で君の誕生日パーティーをしよう」

だが富士山麓の別荘に到着するや鳥越氏は豹変した。強引にキスをし、抵抗するA子さんに性行為を迫り、未遂に終わるや、こう言い放ったのだ。

「バージンだと病気だと思われるよ」――。

これが小誌が先週号で報じた疑惑の内容であり、事件当時、交際相手であるA子さんから相談を受け、現在は夫となった永井氏は「事実です」と認めた。さらに永井氏は、その後、A子さんと二人で鳥越氏と会い、話し合いをしたことも明かした。

だが――。小誌発売日の七月二十一日、鳥越氏の選挙事務所で開かれた民進党都連の選挙対策会議。

「書かれていることは一切事実無根であります」

鳥越氏は関係者を前に疑惑を真っ向から否定した。その後、東京地検に告訴状を提出したと明かした。

だが「事実無根」と言いながら、鳥越氏は小誌に、以下の事実を認めている。

〈数名の学生たちが鳥越の自宅や別荘を訪れて懇親の機会を持ったこと、および、その後A氏ならびにB氏（＝永井夫妻・編集部注）と会ったことはあります〉

後述するが、鳥越氏が永井氏に面識があることは、重要な意味をもつ。

編集部は記事が都知事選の行方に影響を与える可能

小誌が先週報じた鳥越俊太郎氏の「淫行」疑惑への反響は大きかった。その衝撃的な内容に加えて、選挙期間中であったことに対して、

「選挙妨害では」という批判も寄せられた。その声は真摯に受け止めつつ、なぜ小誌が今、疑惑を報じたのか、明らかにしておきたい。

感じました。選挙期間中である以上、一層の慎重さと正確さは必要ですが、取材した事実を読者に提示するのはメディアとしての責任です。むしろいまのテレビや新聞は大人しすぎるという思いもあります」

鳥越氏自身、「サンデー毎日」編集長時代に宇野宗佑元首相の〝三つ指〟愛人問題を報じた際、「編集長から」（一九八九年六月二十五日号）でこう記している。

《性の問題は決して「下品」などと斬って捨てられるものでなく、（略）一国の首相には政治家としての能力以外に「ふさわしい人格と倫理」が求められるのではないでしょうか》

永井氏はこう嘆息する。

「彼が文春の記事を事実無根だと主張して刑事告訴したことには驚きましたし、なにより傷つきました。平然と嘘をつく人間なのは知っていましたが、結局今回も何も変わらなかったんですね……」

鳥越氏に、都知事として「ふさわしい人格と倫理」はあるのか。

《選挙運動の制限に関する規定は、（略）雑誌が、選挙に関し、報道及び評論を掲載するの自由を妨げるものではない》

まず小誌は、「当選を得させない目的」で記事を掲載したのではないことは、既に述べた通りだ。

また記事化に際しては、事件の詳細をA子さんから直接聞いている夫の永井氏に対し複数回の対面取材を行い、「淫行」が事実であるとの証言を得ている。前出の落合弁護士はこう語る。

「疑惑のウラを取って記事にするのはメディアの表現の自由の範疇です。もちろん、いい加減な噂話を垂れ流せば選挙妨害になるでしょう。ただ文春側がきちんと事実関係を立証できれば、公選法違反や選挙妨害には当たりません」

鳥越氏は今年二月、高市早苗総務相の〝電波停止発言〟に、「表現の自由に真っ向から反する」などと猛反発した。当時、鳥越氏と

性があることは承知していた。だが、都知事候補である鳥越氏は公人中の公人である。その資質が問われる事実がある以上、それを報じることは公共性、公益性に広く資するものであると判断し、掲載を決断した。元東京地検検事の落合洋司弁護士はこう語る。

「個人の私生活に関する記事ではありますが、これから都知事になろうとする人の人間性や資質に関わる内容です。今回の文春の書き方であれば、裁判所が『公益性が無い』と判断する可能性は低いと思います」

そもそも鳥越氏の出馬表明は告示の二日前、いわば〝究極の後出しじゃんけん〟だった。それを受けて、小誌が鳥越氏の資質を検証するためには選挙期間中とならざるを得なかった。「選挙後に報じればいい」という批判もあったが、選挙前に報じなければ、読者に判断材料を提供することはできない。

ジャーナリストの青木理氏はこう指摘する。

「正直、文春の記事は『ちょっとファクトが弱い』と

「公職選挙法違反」「選挙妨害」ではないか？

先述した通り、鳥越氏側は、報道は〈事実無根〉として、小誌に抗議文を送付。さらに選挙妨害及び、公職選挙法上の「虚偽事項の公表罪」、刑法上の「名誉毀損」などに当たるとして東京地検に告訴状を提出した。

公職選挙法第二百三十五条には、虚偽事項の公表について〈当選を得させない目的をもって公職の候補者（略）に関し虚偽の事項を公にし、又は事実をゆがめて公にした者〉は罰せられる旨が記されている。

一方で、同法第百四十八条にはこうも記されている。

ともに記者会見したジャーナリストの田原総一朗氏は、今回の「選挙妨害」との指摘にはこう語った。

「規制があるわけでもない

「キスをしただけ」なら「淫行」ではない？

「キスしただけで〝淫行〟はおかしい」

小誌が先週号で報じた鳥越氏の行為について、インターネット上で、こうした書き込みをするジャーナリストも少なくない。

まず、このような事件を報道するうえで、被害者に最大限の配慮をすべきことは言うまでもない。小誌が事実として把握していて、記事には敢えて書いていないことも少なくない。「セカンドレイプ」が社会問題化している昨今ならなおさらだ。永井氏は語る。

「記事では、未遂と一言でくくっていますが、別荘で実際に何があったか、妻から詳細に聞いています。鳥越氏の人間性を疑うような内容でした。すべてを書けば妻はもう一度傷つきます。妻を守るために、このような記事になりました」

鳥越氏は、〈身体の関係を迫った等の事実は一切ありません〉と完全否定したが、A子さんがときに自殺を口にし、今もなお事件に触れることができないほど傷ついているのは事実だ。

ノンフィクション作家の立石泰則氏はこう指摘する。

「女子大生が師弟関係にあるような憧れのジャーナリストに、以前行ったことのある別荘に誘われたら、ついていくのは無理もない。『キスぐらい』という人もいますが、一人でついて行ったら何をされても仕方ないのでしょうか。分別ある男性が教え子を一人で誘うことこそ慎むべきです」

「未遂かどうかはそもそも問題ではない」というのは、山梨学院大学法学部の小菅信子教授だ。

「重要なのは、大学の授業の一環で起きたということ。十年以上前の古い話だとか、そういうレベルの問題ではありません。学内のセクシャルハラスメントであり、女性の人権侵害に当たります。仮にも指導的な立場で来ている人間が、学生に対して、性的な話を持ち出すこと自体が厳禁です」

なぜ被害女性の証言を掲載していないのか？

小誌は、「淫行事件」に関する情報提供を受けて、取材を進める過程で永井夫妻に接触した。

A子さんの心の傷は、想像以上に深かった。永井氏が、A子さんの現状を語る。

「今でも、トラウマを抱えたままです。A子の口から、事件を直接話すのは、とても無理だと思いました。今回の件に関する報道も目に入らないようにしているほどです。あれから十数年、一番近くでA子を見てきたのは私です。だから、私がお話をしたのです」

前出の落合弁護士はこう語る。

「記事に女性の証言はありませんが、夫からの証言は大きい。事件のことも、話が広まり騒ぎになって他の人から又聞きしたのではなく、当時から交際をしていて、本人から話を聞いている。真実だと信じるに足る根拠だと言えるでしょう」

小誌既報通り、事件後にA子さんから相談を受けた永井氏は、鳥越氏に連絡をとり、都内のビジネスホテルで三者の話し合いの場を持った。鳥越氏はその場でA子さんと永井氏に対して「悪かった」と謝り、「もうテレビからは引退する。余生もあまり長くないから」と約束したという。

先述した通り、鳥越氏も、小誌の取材に対して、この面会を認めているのだ。

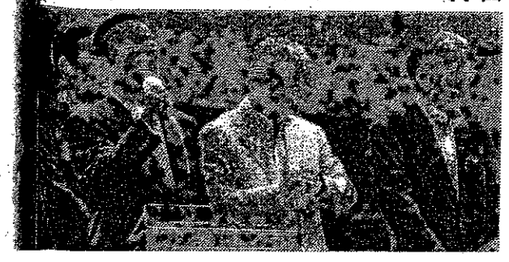
永井氏が指摘する。

「当時の鳥越さんは、『スーパーモーニング』のキャスターに加えて、関西大学の教授も務めていて、多忙なはず。そういう人が、何のために、私たちに会いにビジネスホテルにまで出向く必要があったのでしょうか」

二〇一四年、永井氏は、自身の関わるイベントに鳥越氏が出演することを知り、〈あれからずっと貴方のその後を見てきました〉と、メールを送っている。

「話し合い後も、彼はテレビに出続け、そのたびに私たちは苦しんできました。イベントに出ると知り、我慢できなかった」（同前）

〈あの日、テレビはもうすぐ引退するから許してくれと言いながら、何年も毎朝出続け、あの山荘をへら



自らへの応援演説中もこの表情

へら笑いながら紹介する番組も、憶りずに女子大学生とコンパすると言ってメールをやりとりする番組も、

鳥越氏はジャーナリストなのになぜ説明しないのか？

小誌が疑惑を報じた七月二十一日、報道陣のぶら下がり取材に対して、鳥越氏はこう答えている。

「弁護士の方が窓口になってますのでそこを通してください。これ以上のことを言うつもりはありません」

こうした鳥越氏の姿勢に対して、いち早くツイッター上で批判したのが、前大阪市長の橋下徹氏だ。

〈あれだけ報道の自由を叫んでいたのに自分のことになったらちょっとケツの穴が小さくないか？〉〈鳥越さん、訴える前に、いつも政治家に言っていた説明責任を果たしなさい〉

前出の青木氏もこう語る。

「政治家などの公人がメディアを刑事告訴したり名誉毀損で訴えるのは好ましいことではないと思います。そうした政治家の姿勢がメディアの自由な言論環境を蝕んできた側面がありますし、言論や報道を法律で縛ることには反対です」

鳥越氏は自著『がん患者』のなかで、自身ががん患者として取材を受けてきた理由をこう記している。

〈私は基本的に同業者からの取材依頼は断らない主義だ。自分が常日頃取材する立場でいながら、取材される側になった途端に断るのでは首尾一貫しない〉

なぜ鳥越氏は自ら疑惑について説明しないのか。

「満足に取材に応じず、すぐに法的手段に訴えるというのは昔からで、その方は変わっていません」

こう語るのはジャーナリストの寺澤有氏だ。寺澤氏がそれを知ることになるのは、鳥越氏が出演していた番組がきっかけだった。

「九九年、同番組のスタッフが警察から行動監視のために尾行されるという事件が起こった。スタッフは尾行の一部始終を撮影していたので、国民監視の例として番組で放映しようとしたそうです」（同前）

だがその尾行映像が放映されることはなかった。

「私が鳥越さんにその理由を尋ねると、『テレビ局の上層部と警察が裏取引をしたんだ』と説明されました」（同前）

寺澤氏が顚末を記事にするため、再度鳥越氏に取材すると、驚くべき返事が返ってきた。

「『裏取引をしたかどうかは知らない』と前言を翻したばかりか、雑誌の発売直前になると版元に対して警告書を送り付け、法的手段をちらつかせてきたのです」（同前）

ネット新聞「JanJan」の元記者、増田美智子氏も鳥越氏の〝被害者〟の一人だ。〇七年、ネットメディア「オーマイニュース」の編集長を務めていた鳥越氏の辞任について、増田氏が報じた時のことだ。

「執筆前に編集長辞任について鳥越氏に電話で聞くと、あっさりと事実関係を認めました」（増田氏）

だが記事が出た直後、「『オーマイニュース』から『鳥越氏の発言は捏造だ』と抗議が来たのです。驚いてすぐに鳥越氏に確認の電話をすると『そんなことは言ってない』と言い出し、『（記事を）訂正しないとあなたを訴えるよ』などと恫喝されました。辞任を認めたわずか二日後のことでしたから、本当にいい加減な人だと、怒りを通り越して呆れました」（同前）

小誌が改めて、鳥越氏に寺澤氏と増田氏の発言内容は事実かと尋ねると、「ご承知の通りのこれまでの経緯からして、貴社からの質問にはお答えいたしかねます」と回答が返ってきた。

鳥越氏は、小誌報道について、「なにか政治的な力が働いているとしか思いようがありません」と発言したが、その根拠を問われると「理由は何もありません。僕のカンです。何も事実があるわけではありません」と答えている。

前出の永井氏が憤る。

「彼は政治的圧力云々と言っていますが、私はそもそも野党候補に一票入れたかったんです。けれど、皆が彼の本性を知らないままに、都知事に担ぎ上げてしまうことに危機感を感じて告白に踏み切ったのです」

都民は鳥越氏にいかなる判断を下すのだろうか。

舌鋒鋭く鳥越氏を批判した橋下徹氏

次号8月11・18日号は夏の特大号!!8月3日(水)発売、特別定価430円です

都知事選挙のワイド特集
「重傷」「軽傷」「致命傷」

「週刊文春」淫行疑惑が封印を解いた
「週刊新潮」13年前の被害女性証言記録

この別荘（右）で悪夢は起きた

2003年、大学で講義する鳥越氏（左）

いよいよ投票日が近付いてきた都知事選挙。小池百合子（64）、鳥越俊太郎（76）、増田寛也（64）の3候補者には、いずれも決め手がなく、最後まで熾烈な戦いを繰り広げることになりそう。それは裏を返せば、彼らの脛には重傷、軽傷、致命傷があることを意味するのだ。

鳥越氏は、現場一筋、数多くの修羅場を潜り抜けてきた著名なジャーナリストである。普段から冷静沈着、軽はずみな発言はしない人だった。ところが、『週刊文春』（以下、文春）の記事に関しては、

「私は週刊誌（注・『サンデー毎日』）の仕事をしていたからわかるが、単なる週刊誌の取材記事というより何か政治的な力が働いているのではと思う」

と陰謀論を語ったという。

文春は、先週号（7月21日発売）で〈被害女性の夫が怒りの告白！　鳥越俊太郎都知事候補「女子大生淫行」疑惑〉との記事を掲載。鳥越氏は、公選法違反及び名誉毀損の疑いで、東京地検に告訴状を提出したのはご存知の通りだ。

実を言うと、文春記事でも一部触れられているが、13年前、本誌はこの話を取材していたのだ。

まずは、文春記事を要約すると――。

記事は、主に30代後半の男性の証言で構成されている。それによると、十数年前、鳥越氏は、有名私大の教授と付き合いがあり、その大学に出入りしていた。何人かの学生と交流するうち、2年生だったA子さんと特に親しくなった。そして、自分の別荘に誘い、強引に淫らな行為に及んだというのだ。

証言者の男性は、当時A子さんと交際しており、彼女から鳥越氏に関係を迫られたと聞かされ、激怒した。そして2人で鳥越氏に抗議したという。

その後、A子さんと結婚したが、鳥越氏のことは今も許せないそうだ。

この記事の内容について、鳥越氏は具体的な反論をせず、ただ事実無根と片付け、告訴したわけだ。しかし、当事者による告発は本当にデタラメなのか。

ここに記事にならなかった取材記録が残っている。

文春に告白した男性とA子さんに接触したのは、2003年6月。ひどく落ち込んでいたA子さんは、鳥越氏からのアプローチが2002年からあったと語っていた。以下は取材記録からの抜粋だ。

「7月の半ばくらいから、鳥越さんは毎日連絡して来て、『好きだ』って言われました。初めは冗談だと思っていましたけど……。それでも私は鳥越さんを尊敬し、憧れていました。で、この頃、食事に誘われたのですが、何の疑いもなく2人で食事をしました。その後、彼が一人で借りているマンションに行ったのです」

鳥越氏は1989年8月、毎日新聞社を退職し、10月から「ザ・スクープ」（テレビ朝日系）のキャスターに転身。その頃から家賃40万円の品川レジデンスに住んでいた。

「小金井市の自宅から仕事場（テレ朝）に通うのがきついので、そこに部屋を借りていると言っていました。でも、今思えば、ああいうことをしているのが奥さんにバレないようにするため、借りていたのでしょう。私がマンションに付いて行ったのも、まさかあんなことをする人だと思っていなかったからです。『好きだ』と言ってくれてはいましたが、奥さんもいらっしゃる方ですし。まあ、私自身も軽率だったんですが」

鳥越氏は当時、62歳である。一方、A子さんは二十歳前だった。40以上離れている女性を口説いていたことになるが、

「そのマンションでキスされたんです。すごくビックリしました。それからも『好きだ』と言われ続けて……。一度、鳥越さんに『だって、あなたには奥さんがいるじゃないですか』と訊いたことがあります。すると、彼は『妻のことは全力で愛している。でも、それとこれとは別なんだよ』と言っていました」

「一緒に寝よう」

それから約半月後の8月初め、俄かには信じがたいことが起きたのである。

場所は、富士ドクタービレッジ（山梨県富士河口湖町）にある鳥越氏の別荘だった。

ここは東京から車で2時間弱。件の山荘地からは、富士山はもちろん、本栖湖、南アルプスも遠望できる。再びA子さんの話。

「鳥越さんの山荘に呼ばれました。なぜ、2人で行ったかというと、彼と仲良く

次週は夏季特大号です
8月3日(水)発売
特別定価 四百三十円

演説はグダグダ

している学科の友達も『2人で行こう』と誘われていたみたいだから。それが普通なのかなと思ってしまったんです」

最近はあまり使っていないようだが、

「その山荘は、けっこう人に貸していたようです。部屋は3つあって、すごく広いリビングと和室と洋室。もちろん別々に寝るつもりでしたから、私は洋室に行きました。すると、鳥越さんが『一緒に寝よう』と言い出した。彼を信じていましたから、そうしてしまったのです」

A子さんは、自分の甘さを悔いていて、

「鳥越さんは『何もしない』と言っていました。男性が女性を騙す時の常套手段って言われればそうなんですけど、その頃の私には分からなかったのです。田舎から出てきて、男性の裏の目的なんて全然分かりませんでした。鳥越さんに、私を遊び相手にしようなんていう意図があるとは思えなかった。私がバカだったんです」

鳥越氏と親密になった裏には、ある事情があった。男性はこう語っている。

「山荘に行く前から、鳥越さんには、オレのことで相談にのってもらっていたらしい。A子にとって、オレは初めての彼氏で、戸惑うのも当然です。それで悩んでいたようなんだ。あいつはミーハーだから、鳥越さんはテレビに出ているってだけで信用しちゃったんですよ。彼女にとって、鳥越さんは絶対的な善だった。信じられないかもしれませんが、男の下心なんて分からない奴なんです。まして、相手は信用していた鳥越さんなわけですし」

山荘での一件に話を戻す。A子さんの証言。

「部屋に入って来られてから、半ば強制的に全裸にさせられました。私、初めてだったから、嫌だって言ったんです。それでも『A子は、こういうことを経験していないから自分に自信がないんだ』『今しておけば、彼氏とする時不安にならない。彼氏との関係もうまく行くよ』と言われれば、そうなのかと思ってしまって……」

男性もこう憤慨していた。

「嫌がっているA子に『これだけ歳が離れているのに、こんな関係になれるのは素敵じゃない』って言ったんです。憧れの人だから信じてたんですよ」

だが、最終的に行為は未遂に終わった。

「山荘に行って以降は、2人きりでは会っていません。最近は、騙されたんだなという思いでいっぱい。あー、私のこと面倒くさくなったんだなって。直接謝ってほしいです。でも、メールを送っても返事すらありません。連絡の取りようがない状態です。そういえば、鳥越さんは、自分は先が長くないと言っていた。激務で睡眠薬を飲まないと、耳鳴りがして眠れないのだとか。年齢が年齢だし、すごく同情しました。実際、薬もたくさん飲んでいましたが、それも嘘だったのかな」(A子さん)

A子さんと男性の証言を受け、本誌は品川レジデンスで鳥越氏に2人の話をぶつけた。すると、

「山荘には2人で行った。でも、何もない。あるわけない。まあ、女性からそう言われたら、男は何も言えないけどね」

と、否定したのだ。

「二度と思い出したくない」

本誌は、ここまで取材したものの、結局記事にはしなかった。その理由は、A子さんと男性が締切近くになって、「やはり、記事にしないでほしい」と強く希望したからだ。

思えば、その頃の鳥越氏といえば、「ザ・スクープ」のキャスターに加え、「スーパーモーニング」(テレビ朝日系)のレギュラーコメンテーターも務めていた。加えて関西大学で教鞭をとるなど、日本のオピニオンリーダー的存在であった。二十歳そこそこの学生が、まともに戦える相手ではないとの判断があったようだ。

が、文春報道で、その封印は解かれた。鳥越氏が都知事に相応しいかどうかを考える際の判断材料として、13年前の証言を掲載した次第である。

今回、鳥越氏に聞くと、

「数名の学生たちが鳥越の自宅や別荘を訪れて懇親の機会を持ったこと、A子さんならびにその彼氏と会ったことはあります。しかし、鳥越がA子さんに対し身体の関係を迫った等の事実は一切ありません。その他の質問事項もすべて事実無根です」(事務所)

との回答が寄せられた。

A子さんは、

「鳥越さんの山荘で起きたことは、二度と思い出したくないです。今後、私の長い人生を苦しめると思います」

と、予想していた。実際そうなっているようだが、鳥越氏は、彼女の声をどう聞くのだろう。根拠なき陰謀論で、言い訳している場合ではないのだ。

「反権力のジャーナリスト」が東京地検に告訴でアレレ?

〈鳥越氏 苦戦〉(7月25日付朝日新聞朝刊)、〈伸び悩む鳥越氏〉(同日付産経新聞朝刊)。鳴物入りで都知事選に名乗りを上げたジャーナリストが窮地に立たされている。が、自業自得か。なにしろ、気に入らない報道をいきなり刑事告訴するという挙に出たのだから。

〈本日、発売された週刊文春の記事につき、(中略)東京地方検察庁に対し、刑法第230条名誉毀損及び、公職選挙法第148条第1項但書、同法第235条の2第1項違反で週刊文春編集人新谷学に対する告訴状を提出しました〉

7月21日、鳥越氏の弁護団はこんなコメントを発表した。前項で触れた淫行疑惑報道を、彼は司法の場に持ち込んだわけだ。言わずもがな、鳥越氏は毎日新聞OBのジャーナリストであり、一市井人とは立場が異なる。サンケイ新聞OBで政治評論家の俵孝太郎氏が、

「言論界の人間は言論で戦うべきです。説明責任も果たさずに告訴だなんて、報道を事実と認めて逃げたと思われて当然。そもそも、告訴はあくまで検察側への説明であり、有権者に対しては何の説明にもなっていないことに全く気付いていない」

こう断じるのも、むべなるかなである。言ってみれば、鳥越氏は都知事になりたいあまりに、ジャーナリストの唯一の武器とも言える言論を投げ捨てたのだ。

しかも、彼は日本を代表する反権力ジャーナリストとして名声を高めてきた。例えば、今年2月の高市早苗総務相による「電波停止発言」を受けて、

「安倍政権からの恫喝、脅しだ。安倍政権のなめきった態度が高市発言となって現れた」

と、噛みついた。しかし今回は、彼自身がメディアに対して刑事告訴という「恫喝」を行ったのである。

実は鳥越氏のこうした姿勢は今度が初めてではない。本誌は5月に〈「デタラメ家系図」だったNHKの「鳥越俊太郎」ファミリーヒストリー〉と題した記事を掲載したが、その際、彼に取材した本誌の20代の記者にこう凄んでいたのだ。

「いいですか? 私の名誉が毀損されるようなことになった場合、訴える相手は編集部でもなければ、編集長でもない。あなただよ」

鳥越氏が頼った「ザ・権力」

『鳥越氏は権力主義者』

また、彼は反権力活動の一環として、次のような検察批判も展開してきた。

〈検察という組織が根本のところで信じられないのです〉

〈検察庁を信用する気にはなれません〉(いずれも2010年2月22日付毎日新聞朝刊)

切羽詰まると、「信用できない」と言っていた検察、すなわち泣く子も黙ると恐れられてきた権力の中の権力に縋って、己の身を守ろうというのだから、反権力ジャーナリストが聞いて呆れるではないか。

時事通信OBで政治評論家の屋山太郎氏が喝破する。

「鳥越俊太郎」のご著書とご発言で振り返るトホホ言行録

前項で検証したように、都知事候補としてもジャーナリストとしても致命傷を負い、終幕が近付いている感が漂う鳥越氏。では、その「隠」に、彼の「功績」を振り返ってみることにしよう。以下はご著書とご発言に見る「鳥越語録」。

「反権力を訴えて注目されることで、鳥越氏は自分が権力者になったと勘違いしちゃったんだろうね。結局、彼が一番の権力主義者だったってことじゃないかな。だって、がんの手術を4回も受けた70代後半の人間が都知事になりたいって、よっぽどの執着でしょ？」

とどのつまり、今回の選挙で鳥越氏の「地金」が現れ出た格好なのだ。次項では、そんな彼の実像にさらに迫ってみる。

まずは「ボケ」発言から。7月12日の出馬表明会見で彼はこう述べている。

「昭和15年の生まれ。終戦の時、20歳でした。もちろん空襲も覚えています」

5年で20も歳を取ったと言う鳥越氏の「痴呆」が疑われるが、無論、彼一流の「冗談」であろう。クスリとも笑えないが……。

続いては、歪んだ「人権感覚」が表れている発言。2008年、大阪で30歳の男性を轢き逃げした22歳のホストを、鳥越氏はテレビでこんな風に庇ってみせた。

「根っからの悪人ではないと思うんですね」

「酒を飲んでいる、免許がない、警察に捕まる。大変なことになるんで、逃げる。そういう心理に、人間がなることもあるだろうと思うんですね」

なおこの轢き逃げ犯は、それ以前に別件の詐欺事件で有罪判決を受けている。

君は知事選を勝ち抜く覚悟ができているか？

これを悪人と言わずして、何と言おうか。

反東京!?

さらに、鳥越氏のジャーナリストとしての資質そのものを疑いたくなる原稿を紹介する。13年4月に出版された『「拉致疑惑」と帰国 ハイジャックから祖国へ』に、彼は「検証役」として10頁にわたって寄稿している。鳥越氏は小西隆裕や森順子、黒田佐喜子といった「よど号犯」とその妻たちを平壌で取材。後者2人は北朝鮮による拉致事件に関わったとして国際手配されているのだが、彼らに話を聞いた鳥越氏はその原稿にこう記しているのだ。

〈小西氏らの証言に論理的破綻は感じとれなかった〉

〈皮膚感覚としては何か隠しているふうは感じられなかった〉

〈森順子氏、黒田佐喜子氏にも、話を聞いてみたが、（中略）特に不自然なところは感じられず、論旨も説得的で、彼ら・彼女らが「日本人獲得運動をやる必要はなかった」という主張も否定できない〉

つまり、拉致に関与していないと嘯くよど号グループの言い分を「皮膚感覚」で信じたというのである。

拉致被害者の支援組織「救う会」の西岡力会長が呆れる。

「鳥越氏はよど号メンバーによる拉致工作を告白しているメンバー元妻の八尾恵や、警察の捜査過程を取材していない。その上、主張の根拠が『皮膚感覚』……。ファクトの積み上げではなく、感覚で拉致問題の検証を行うなんて信じ難い。テロを敢行した極端な政治集団であるよど号グループの一方的な宣伝を鵜呑みにしていて、ジャーナリスト失格です。警視庁を擁する東京都の知事にふさわしいとはとても言えません」

最後に、昨年出版された鳥越氏の著書『君は人生を戦い抜く覚悟ができているか？』から引用しておく。

〈小さいころからみんなが好きなもの、支持するものは嫌いでした。だから、子どものころから「反ジャイアンツ」「反自民党」「反東京」を標榜していました〉

反東京を公言しながら都知事を目指す鳥越氏。彼のこの奇怪な「皮膚感覚」をどうか責めないでいただきたい。世の中に「根っからの悪人」はいないのだから。

講演料の相場は2倍に跳ね上がる「増田寛也」負けて勝つ

容赦なき西日敗戦投手かな（佐藤博美）。これとは逆に、負けても朝日を浴びる候補がいる。自公推薦の他ならぬ増田寛也元総務相（64）は、都知事選を通じて低かった知名度を高め、講演料の相場は2倍に跳ね上がると噂されているのだ。

柄じゃない？

増田候補の財産面について、永田町関係者によると、「彼の居宅は港区赤坂・45階建てマンションの35階にある。新築当時に約1億5000万円だったものが、今や2億円程に値上がり。他に預貯金や株を含め1億円近い財産を保有している」

もっとも、彼は出馬に色気を見せ始めた際に、「スカイツリーから飛び降りる覚悟がなければ」と慎重な姿勢を崩さなかった。出馬決断の折には東電の社外取締役ならびに野村総研の顧問を辞すことで報酬を失う、いわば後顧の憂いがあったからだ。有価証券報告書などを参照すると、合わせて年間およそ1500万円になる。とはいえ、都知事選を通じ、それを補って余りある果実を手に入れるというのだ。

このことに触れる前に、情勢をざっと見ておく。各社の調査は押しなべて、「トップ小池を増田が追い上げ、差を詰めてはいるものの、最終的には及ばず」を仄めかしている。なかには、ある党が行なった最新調査の結果として、増田候補が小池女史に1ポイント差で肉薄するという数字も出回ったが、随分と下駄をはかせたものだった。事実、

「大変な苦戦を強いられています」

と、自民党のさる都連幹部が嘆息する。

「理由は大きく2つある。その1が、小池さんが自民党の候補のひとりと見做されていること。その2が、外国人参政権に関して増田さんがイエス・ノーをはっきりさせていないこと。〝都民の話を聞いて、慎重な方向で考えることが必要〟と悠長に構えている。これじゃ保守のコア票は逃げる。ダダ漏れですよ」

遊説回数が多いせいで

その一方で、政治ジャーナリストの鈴木哲夫氏は、

「増田さんは、民間団体『日本創成会議』の座長として、〝少子高齢化が進んで、2040年ごろ、日本の896の自治体が『消滅可能性都市』となる。地方自治の仕組みを変えなければならない〟と訴えてきました。まったくの正論なんです」

と評し、こう続ける。

「仮に落選したとしても、今後も地方自治の分野で重要な政治的役割を果たすと思いますよ。それに、今回の有力候補者3人のなかで、最も遊説回数が多いせいで、じわじわ支持率や知名度が上がってきている」

そのことが、専門家としての増田評を高からしめるというわけだ。政治部デスクが後を受け、

「彼は地方自治を語ることについては第一人者。講演料は100万円を下らないレベルでしたが、選挙が良い宣伝になって引く手あまた。いきおい、講演料の相場も倍になる」

最後に、選挙戦最終盤の光景を披露しておこう。聴衆約100人。まばらとは言えないまでも寂しい集まり具合の中野駅北口。応援演説に立った太田昭宏前国交相が、

「増田の『ま』は『まじめ』の『ま』。もう名前を知らない人はいないでしょう」

としつつも、増田寛也増田寛也……と5回連呼したのだった。

容赦なき連呼敗戦候補かな——。選挙に負けて勝つ。瓢箪から駒のような話だ。

味と心の贈りもの
創業 明治二十八年
牛肉佃煮
浅草今半
都内百貨店名店街でどうぞ！
東京都台東区西浅草二-七-四
お問い合せ 〇三-三八四二-七三三〇